

# 医療法人 愛精会 あいせい紀年病院 精神科病院における検査導入 ～あいせい紀年病院を訪ねて～

編集委員 藤原 倫行／谷井 通世



あいせい紀年病院 外観

## 所在地



医療法人 愛精会 あいせい紀年病院は愛知県名古屋市南区曾池町にあり、古い歴史がありながら新しい医療も積極的に取り入れる都市型の精神科病院です。

日立製作所製の光トポグラフィ装置、骨密度測定装置、さらにMRIシステムを導入、ご使用いただいています。

今回、藤原ほか4名が訪問して精神科病院として各装置を用いた検査などについてお聞きしました。

## ○あいせい紀年病院の歴史

1948年9月、精神衛生法の制定(1950年)に先駆けた県下5番目の精神科病院として開設されました。現理事長の就任(1987年)後、病院本館の改装、病院管理・運営体制の刷新などの改革が始まり、2001年、病院全体の増改築に伴い整形外科外来、手術室、運動療法室が新設されました。さらに2002年には院内情報公開作業を進めるため院内ネットワークシステムを構築し、特許を取得されています。また「カウンセリングルームあいせい」を開設し、臨床心理士による専門相談

も始められています。

2004年には「あいせい紀年病院」と名称変更し、2007年6月に急性期病棟を開設。2012年には光トポグラフィを導入、その後骨密度測定装置も導入し、2017年にはオープンMRIを導入されました。

### ○はじめに病院の理念について、杉浦院長と森理事長にお話を伺いました。

藤原：あいせい紀年病院様の理念についてお聞かせください。

杉浦院長：こころとからだに病(やまい)をもつ患者さんに、常に「安全で適切な」医療を提供し、「社会に貢献」できる医療を行うことに努めています。

あいせい紀年病院は商店街に程近い閑静な住宅街の中にあります。都市型の治療病院として明るく開放的な雰囲気の中で、すべてのスタッフがそれぞれの専門性を活かし、患者さんの心とからだのケアを中心としたサポートを行う、患者さん中心のあたたかい医療を実践したいと思っています。

藤原：あいせい紀年病院様における診療の現状と方向性についてお聞かせください。

森理事長：あいせい紀年病院だけでなく、精神科病院は近年全体的に患者数、特に入院患者数が減っています。これは日本の人口が減少していることと、病気の治療が非常に進んで良い薬がたくさん出てきているということが背景にあります。入院に関しては、入院期間が短くなり、空床率が上がってきています。

そこで昔のように入院だけに頼る仕組みでは今後病院の運営が非常に難しくなっていくことが予想されましたので、当院では早いうちから个性的な病院になろうじゃないか、ということいろいろ考えてきました。その取り組みとして合併症の治療やいろいろな検査のための機器を導入するということに着目したわけです。

### ○続いて、整形外科について伺いました。

藤原：个性的な病院をめざしておられるということと関連するのかもしれませんが、なぜ整形外科を設置されたのでしょうか。精神科病院に整形外科が設置されているというのは全国的にも珍しいと思うのですが。

森理事長：合併症の中で比較的見落とされているのが整形外科領域の合併症であるとの印象を以前から持っていました。これは日本の精神科病院に特異な傾向です。

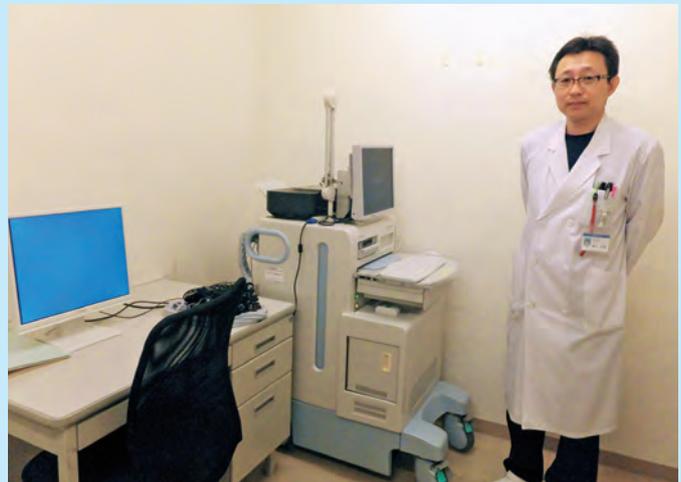
実際は国際的にみれば、精神科の合併症というのは糖尿病や高血圧といったメタボリック症候群に関わる合併症が多いのですが、日本の場合は海外に比べると政策的に長期入院が多くなっており、入院患者さんが高齢化して様相が異なっています。入院中に骨折したり歩行ができなくなってしまったり、整形外科的な疾患が意外と多いことが以前から気になっていました。そういった整形外科的な疾患を患った場合、これまではほかの整形外科の病院にお願いしてきました。そうするとほかの病院で手術をしますが、転院先の病院において精神科領域の患者さんの対応が非常に難しいということで本来十分なりハビリを経て退院するところをすぐに返されてきてしまいます。きちんとリハビリをしていないため、偽関節を作ってしまったたり、ちゃんと歩けるはずなのに歩けなくなってしまったり、いろいろな不都合が起っていました。

立川：精神科の患者様が整形の病院に転院されても、そこで適切なケアがされない、ということですか。

森理事長：簡単なリハビリすら難しいのです。精神科の患者さんは一般的な患者さんとは対応が異なるため、整形外科の看護師、運動療法士はどう対応して良いか分からないのです。それなら精神科の病院で整形外科領域の手術もしてリハビリまで行えばきちんとした治療が行えるのではないかと、ということでたまたま従兄弟が整形外科医だったこともあり、相談して一緒に病院をやっていくことにしました。これに伴い整形外科、手術室、さらに運動療法室も作りました。整形



森 隆夫 理事長



光トポグラフィ装置 ETG-4000

外科領域の治療というのは手術を行った場合、手術後のリハビリも含めて行わなければ適切な治療とはいえないと考えているからです。

#### ○次に、光トポグラフィー検査について伺いました。

藤原：使用していただいております光トポグラフィーの検査についてお聞かせください。日立の光トポグラフィ装置はいいせい紀年病院様がめざす医療遂行への手助けとなっているのでしょうか。

森理事長：当院では、2014年度より保険診療として光トポグラフィー検査を実施しています。これまで問診を中心に行ってきた精神科診療に客観的な結果が得られる検査が追加されたということには、大きなメリットがあります。本検査は、客観的なデータを示すことができるため、その後の治療に対する患者さんの理解も得やすくなり、また、うつ病と双極性障害を早期に鑑別できる可能性を含んでおり、より確度の高い治療薬の選択にも役立ちます。しかし、本検査は鑑別診断の補助という位置づけですので、本検査だけで確定診断を行うことはできません。したがって、本検査は、特にうつ病を専門にされている医師が、適正に使用することがもっとも適切な使用法といえるでしょう。

杉浦院長：精神科には、背景、生活歴など多様な問題を抱えた方が来られます。主治医もまた、他科に比べ考え方に相違が出やすいのも事実です。そのような中で、光トポグラフィやMRIなど客観的なデータが有用になることが十分ありえると考えています。

森理事長：いろいろな検査のための機器を導入するというところに着目してはいますが、一方で信頼性が高く、きちんと診てくれる、安心できる病院をめざしており、収集したデータをどのように活用するか、どう地域の人たちに役立つものにするか、ということを常に考えています。また、このような病院の思いや情報を全職員に公開することが当院の大きな特色と

なっており、本年は目標の一つとして、光トポグラフィなどの機器を有効利用するための手立てを考えましょう。医療の枠を飛び出してでも世の中のためになるようなことであればぜひ私たちに上げてくださいとお話しています。

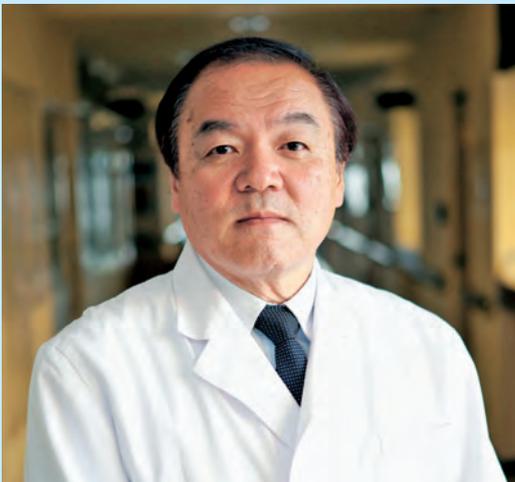
このような背景もあり、当院では光トポグラフィー検査の条件を厳しくしており、気軽に受けられる仕組みになっていないためそれほどたくさん検査が実施できているわけではありません。しかしながら、それでも今年に入ってあるクリニックから当院の光トポグラフィー検査で連携したい、という連絡を受けました。検査に至る件数は今はまだ少ないですが、このクリニックのようなお話もありますから、光トポグラフィー検査がだんだん浸透してくれば検査数が増えていく可能性はあると思います。

#### ○骨密度検査に関し、骨粗鬆症に対する取り組みを鈴木副院長にお聞きしました。

立川：あいせい紀年病院様の骨粗鬆症に対する取り組みを病院の特性、高齢化など社会的な背景も踏まえてお聞かせください。

鈴木副院長：大きく分けて2つあります。1つは地域の人たちの骨粗鬆症の治療、もう1つは精神科の患者さんの骨粗鬆症の治療と研究で、厚生労働省からの委託研究として3年ほど前から取り組んでいます。前者への取り組みとして、一般の方を対象とした外来をやっています。こちらの外来は精神科外来とは入り口も分けています。後者への取り組みとしては、現在精神科での骨粗鬆症の研究というのは全くされていません。どれくらいの方が罹患されているかといったデータも全くないため、3年くらい前から全国的に調べることとなりました。そこで当院では腰椎・大腿骨を測定できるDXA(Dual Energy X-ray Absorptiometry)\*を導入し、精神科における骨粗鬆症の治療と研究に役立てようと考えました。

まず昨年、DXAで当院の患者さん全員の骨密度検査を实



鈴木 正孝 副院長



骨密度測定装置 DCS-900FX

施しました。そして今年から3年間の計画で骨密度の高い人と低い人で転び方に違いがあるのではないかと、という観点から転倒、立位安定性などの研究を進めています。当院がひな形の病院となり、骨粗鬆症を調べ有効な治療方法がないか、ということを経年かけて調べていきたいと思っています。腰椎は良いが大腿骨が悪い、というタイプの場合、腰椎に有効な薬を処方しても意味がなく、股関節の骨密度が上がるような薬を処方しなくてはなりません。DXAではそれらが弁別できるということが非常に良い点です。また、薬の処方に対する概念も昔とは変わってきており、一定期間継続使用後にマークや骨密度検査を再度行い、検査結果に基づいて薬を変えていっています。

立川：骨密度を測定することにより、患者様の骨粗鬆症に対する変化はございましたか？

鈴木副院長：患者さんの評判は非常に良いです。というのも外来で来た方に対し、血液の検査も当然行いますが、マークなど血液の検査はすぐには結果が出ません。一方DXAの検査は検査結果をその日のうちにお伝えすることができます。また骨密度の結果レポートは図示されるのでなおさら良い。グラフにより前回検査との対比や、若い人と比較するなど結果を患者さんに説明しやすく、かつ喜んでいただけます。結果が良くなると患者さんのモチベーションも上がりますね。患者さんは心配して来ているわけですから、なるべく早く結果を出すというのは非常に大事なことです。

#### ○次にMRI導入について、精神科、整形外科における検査機器の活用についてお聞きました。

藤原：日立のオープンMRIシステムを選んでいただいた背景は何ですか？

鈴木副院長：1つは経済性が良いこと、もう1つは設置場所、つまり部屋に入るかどうかということです。さらに現在の結果画像をみて、この画像なら読めると判断したからです。やはり閉所恐怖症など通常のMRIでは不安を感じる人にも検査ができるということは大きいですね。音が静かで圧迫感が少ないということで、患者さんの反応も良いです。ほかの病院で受けた通常のMRI検査がつかったので、再検査の際には当院のオープンMRIでやってほしい、という声が非常に多いです。

立川：MRIで運動器を検査することについてお聞かせください。

鈴木副院長：運動器のMRI検査はこれから実施いたしますが、主にひざと腰を検査するためにすでに多くの患者さんが検査を予定しています。整形外科の外来で一番多いのは変形性ひざ関節症ですが、比較的大きな人工関節の手術まで行くかどうか判断するために半月板の状態をMRIで検査します。

立川：精神科の患者様もひざ関節症の方は多いのですか？

鈴木副院長：精神科の患者さんは拘縮の方が多いです。変形性関節症もたくさんいますが、歳をとると活動が鈍くなり関節症よりも骨折などの方が多い。また、腰痛、圧迫骨折も多いですね。データとして全国的にみると圧迫骨折というのは少ないのですが、それは見逃されていることが多いためです。専門家がいない当院でも今現在の圧迫骨折の検出率は7~8割と考えています。

立川：X線では現れない早期の椎体骨折がMRIではとらえられるという話を聞いたことがあります。

鈴木副院長：それは非常に有効な方法です。レントゲンでは写らないのですが、MRIで検査すると検出が可能になります。当院でもこれまではレントゲンしかなかったので圧迫骨折の可能性を疑い心配になって何回も撮り直していましたが、これからはMRIを活用していきます。

#### ○最後に精神科病院の今後の展望、使命について伺いました。

森理事長：はじめに申しましたとおり、日本全体として人口が減っています。精神科にとっても患者さんは減り、なおかつ良い薬がどんどん出てきており入院患者数、入院期間も減ってきています。そのため、ベッド数は維持できず、ベッド数を減らしていかなければなりません、ベッド数の削減だけでなく、その先の「地域移行」を考えなければなりません。退院し、地域で生活している患者さんを再入院させないよう、病院も診療所とともに地域で支えるという役割があると考えています。患者さんに地域で生活していただくためには病院、診療所の枠を越えて医療関係者全員がきちんと支えていくという仕組みを作っていかなければなりません。そういった中で当院としては「個性的な」病院を作っておいて、いざという時に地域の人たちに頼られる病院にしたいという思いがあります。



オープンMRIシステム AIRIS Vento\*

## ○おわりに

精神科病院における日本ならではの整形外科の必要性、整形外科におけるMRIシステムの活用についてこれらすべてを備えるあいせい紀年病院様の事例から知ることができました。また、医療機器メーカーにとってそれを使う医師や技師の先の患者様についてのお話というのはなかなか聞く機会がありませんでしたが、今回森理事長、杉浦院長、鈴木副院長からお話を伺いその様子を知ることができたことは非常に貴重な経験となりました。これから私たちが医療機器を開発するにあたって、先生方にとって使いやすい機器を開発することはも

ちろんですが、その先の患者様を思って開発し、患者様に喜んでいただける機器を作りたいと改めて強く感じました。今回の訪問に際し、ご多忙の中長時間にわたりご協力いただきましたあいせい紀年病院の皆様に深く感謝申し上げます。

\* DXA (Dual Energy X-ray Absorptiometry) : 2種類の異なる低エネルギー単色化X線ビームを生体に透過させ、その透過率の変化によって骨密度を測定します。

※ AIRIS VentoおよびAIRISは株式会社日立製作所の登録商標です。



後列左から当社 立川部長代理、名古屋第二営業所 下尾所員、藤原担当部長  
前列左からあいせい紀年病院 森理事長、鈴木副院長